

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第9号 2015年9月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江 3-4-1
近畿大学教職教育部 富岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 捨てたもんじゃない! 社会にある小さな心遣い	谷本 宗生	2
逸話と世評で綴る女子教育史(9) 黒田清隆の女子教育論と女子留学生	神辺 靖光	7
人はいかにして、人たり得るのか!(そのII) —作家文人・タレント・俳優の回顧談(上京物語)から—	谷本 宗生	10
大阪市の女子教育① 女子教育と家政学 —大阪市立大学生活科学部に着目して—	徳山 倫子	16
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道 第9回 学校沿革史にみる補習科・専攻科(5):福岡県(5)	吉野 剛弘	20
〈資料紹介〉立教大学における戦後資料 —『立教大学新聞』にみる学生運動(4)—	田中 智子	23
近代日本における大学予備教育の研究⑨ —東京商科大学の学科課程に注目して—	山本 剛	26
旧制中学校生徒の伝統とスポーツ	堤 ひろゆき	30
旧制高等学校記念館第20回夏期教育セミナー開催報告 帝国大学の中の専門学校 —北海道帝国大学と専門部の卒業後進路—	金澤 冬樹	35
新制大学の生態誌(8) —新制大学と戦争・平和〔2〕	松嶋 哲哉	38
『岩手学事彙報』中の東北地区での森有礼演説記事 どんなことが「自治ではない」とみなされたのか(7) —相談会に対する小林有也校長の指導(その2)—	井上 美香子	43
	小宮山 道夫	46
刊行要項(2015年6月15日現在)	富岡 勝	51
編集後記		54
		55

コラム

捨てたもんじゃない! 社会にある小さな心遣い

たにもと むねお

谷本 宗生(大東文化大学)

昨今、気持ちがたしかに暗くなるような事件や事故が多い気もする。そのいっぽうで、まだまだ世の中捨てたもんじゃない!と、ほっと心温まる出来事やニュースも目にまたは耳にする。本年 8 月末、横浜

市営の路線バス内での出来事(実話)である。バスのなかで、乳児をあやす母親がとても困っている。赤ちゃんが物凄く泣き止まないからだ。母親は乗客らを気にして頭をなんども下げながら、赤ちゃんをあやそうと必死だ。バスの雰囲気も、ちょっとね?という感じになり始める。そんななか、突然こんな感じのアナウンスが車内に流れる。“お母さん、大丈夫ですよ。赤ちゃん、とても元気ですね。眠いのか疲れてるのかな、きっとお腹がすいてるのかな。心配ないですよ。”この温かいエピソードは、直ぐにネットにアップされ拡散される。そんなアナウンスを発したのは、運転手歴 20 年の鈴木健児さんだという。バス会社の運転マニュアルに規定されていなくとも、乗客のお母さんにまず落ち着いてもらうことは当然な対応であろうと語っている(「バス運転士の機転・感動“車内アナウンス”」TV 朝日『グッド! モーニング』2015.9.3 ほか)。

そんな身近での話をテレビやネットで見聞きするにつけ、なんだか私@谷本も嬉しくなってしまう。下記は実話ではないのだが、偶然私が目にした小説@ショートストーリーがある。作家@角田光代さんの「私たちの黄色」(第 1 話)である。「電車なんか乗るんじゃなかった。なんでこんなに泣き止まないの。私に意地悪しているの? 周囲の視線がガラスの破片みたいに突き刺さる。舌打ちも聞こえる。自分の顔から表情が消えていくのがわかる。そのとき、『これどうぞ』と黄色い箱が差し込まれた。着物姿のちいさなおばあさんが笑っている。まだ六カ月の子に食べられるわけないでしょって、にらみつけそうになって気づいた。赤ちゃんにじゃない、疲れ

果てた私にだ。ありがとう。頭を下げる。黄色い箱からキャラメルを一粒出して口に入れる。だいじょうぶだいじょうぶ。どこからか声が聞こえる。ようやく私は、抱っこ紐のなかの赤ちゃんに笑いかける。」(森永キャラメル@いいよね、キャラメル。ショートストーリー)。角田さんの小説と横浜のバス内の出来事とが不思議と重なってくる気がする。

心理カウンセラーとしてもっか活躍する塚越友子さんは、大学生時代には善福寺の東京女子大に在学し、カレッジストリングスという弦楽合奏団に所属していたという。「週三回、十八時～二十時まで練習する。パート練習には恐怖の一人弾きという練習があった。全員の前で、音程やリズムが正確になるまで弾かされる。弦楽合奏なので、ちょっとの音程のズレも許されないから大切な練習なのだが、先輩・後輩の中で絶対に間違えられない緊張は、修士論文の口頭試問よりも恐怖だった記憶がある。合宿では、ご飯の時間以外はずっとバイオリンを練習しているので、白い壁を見ると楽譜の残像が見えるくらいになる。夜中、ホールで寝ずに練習する『闇練』もマストだった。練習量が多い・少ないだけで、喧嘩することもあった。」(塚越友子「私の東京物語」3『東京新聞』2015年8月28日)。でも不思議合奏団員らとの仲直りは、いつも西荻窪駅近くのモーツァルトが流れる喫茶店でハート形@ホットケーキに黒蜜をかけ一緒に食べるのだそうだ。「女子は甘いものを食べれば仲直りできる!?わけではないが、なぜか前よりずっと仲良しになっているのです。」(塚越「私の東京物語」3)。お互いの気遣い思い遣り(仲直り)は、ちょっとしたスイーツ@甘味を一緒に口にすることがそのキッカケになるという。なるほど納得。そういえば、グリコの短編CMで俳優@妻夫木聡くんがピエロ(お菓子の妖精?か)に扮して不機嫌であったり落ち込んでいる人たちを不思議と元気にさせる話は、とても感動した印象がある。カーペンターズの名曲“Close to You”もストーリーとマッチしていて、下記のサイトからその

CM をご覧になれば、読者諸氏もきっと同感されるだろう。短い時間ながら映像と音楽の力も侮れない。角田さんのショートストーリーと同様に。

http://www.glico.co.jp/corp_promotion/14_cm_90b.html

2014年に日本・米国・中国・韓国の高校生を対象にして「生活と意識」の調査(国立青少年教育振興機構の調べ)が実施され、このほどその調査結果が公表されている(「なぜ日本の高校生 ネガティブ思考」『東京新聞』2015年9月8日、24面ほか)。とくに「自分はダメな人間だと思うことがある」という質問に対して、それを認める回答の割合が米国45%、中国56%、韓国35%に比べ、日本73%という異例の高さを示した点は特徴的であろう。日本の高校生がその年齢の時点で、自分を「ダメな人間」と肯定する悲劇は社会として看過出来ないものである。なお尾木ママこと教育評論家@尾木直樹さんは、高校受験が大きな要因として、「高校受験は十五歳の段階で格差をつける。先進国ではほとんど実施していない。人格や情操、生活力を身に付けるべき時期に、入試で地域のトップ校から底辺まで選別したら、他人と比較してダメだと思う子が増えるのは当然」(『東京新聞』2015年9月8日)と憤慨する。たしかに、狭小な学力評価基準による過酷な受験競争は是正されるべきであるが、一概に他人と比較する競争の効果を否定するというのはどうだろうか。多様な選択肢のもとで、学力・スポーツ・芸能など複数の能力に応じて競争があることはよいと感じる。活力ある社会には必ず相応の競争原理が働き、それにともない優越感や劣等感も生じ、向上心やライバル意識、まして仲間意識も生じるものである。一時的に劣ることがある競争(たとえば中学受験や高校受験)の結果としてあったとしても、それで自分がだからダメな人間である!と考えるのは早計である。このような短絡的な高校生の思考が割合的に数多いというのは、やはり何某が構造的な問題があると考えられる。容易にダメな人間であるはずがない! のだから。

そのような青年意識に対して、栃木市在住@館野博さん(当時 77 歳)の投書「綴った日記が自分も励ます」(『東京新聞』2014 年 5 月 6 日、5 面)は、人生の先輩から新年度という節目の多くのかたにエールをおくる内容で、とても勇気づけられる記事である。「人生にはいろいろな節目がある。春は新たな旅立ちという点で、大きな節目だ。家族と離れての大学進学、入社、転勤など希望と期待に胸膨らませてのスタートである。これらの節目をきっかけに、日記を書き始めるのも長く続くコツである。私は何十年も日記を書き続けている。一日一日の出来事や感動したことなどを、真っ白なページに一字一字記していくのだ。新しい人々との出会いや慣れない環境に不安が募り、落ち込むこともあるだろう。そんな時は日記が力になってくれる。一日を静かに振り返り、気持ちを綴っていく。書いていくうちに妙に気持ちが落ち着いてきて、自分をしっかりと見つめ直せるようになるから不思議だ。私はこれまでにどれほど日記に助けられ、励まされたことか。書き続けることで、人生の立派な記録にもなる。」。毎日日記をつける行為は、自分自身を冷静に振り返ることになり、自分の気持ちを素直に綴っていける。館野さんは、そんな日記を何十年も書き続けているという。日記は自分がいかに生きてきたか、そして今たしかに生きていることの証しであり、これぞ人生の縮図といえるかもしれない。日記の効用のススメ!は、とくに不満や不安をもつかたがたに説得力ある助言であろう。

また元ピリギャル(成績が学年ピリで金髪ギャル)で、一念発起して慶應義塾大学に現役合格したことで話題となったウエディングプランナー@小林さやかさん(1988 年～)のインタビュー記事「目標に向かってノートを埋め続ける。そこにある文字が、人との関係を深め、夢を実現させてくれた。」(コクヨ HP『てがきびと』14 号所収)を読んでも、日記の効用をやはり強調している。「[塾講師] 坪田[信貴]先生に[受験勉強中]『自分の中でモヤモヤしたものがあれば、日記にしないさい』と言われたんです。

ある時、『私[さやか]は勉強ばかりなのに、男の子の話しかしない同級生がいてムカつく』と話したら、『その子のいい所を 20 個書いてごらん』と。その夜、日記に 20 個書き出したら、『案外いい子じゃない?』と思えましたよ(笑)。手で書くことで気持ちが整えられたり、頭の中が整理されることを実感しました。」「ズボラですが、たまに[今も日記は]自由な気持ちで書いています。今 27 歳で、[2014 年に結婚し]そろそろ子どもがほしいと思っているので、もし赤ちゃんに恵まれたら、ママ日記は必ず書こうと思います。」。笑。そして現在、小林さんはウエディングプランナーとして、気持ちを込めて手紙を書くことの重要性も認識しているという。「結婚式が終わってお見送りする際は、最後に必ず手紙をお渡ししています。そのお返事などをいただくことも多いですね。手紙を入れる宝箱を作ったのですが、もう閉まらないくらいです。プランナーには、仕事とプライベートの一线を置きたい人が少なくありません。…ですが、私は、式が終わったあともおつきあいできるような関係がうれしいですね。」「せっかく出会えた方と『はい終わり、さようなら』というのは嫌ですね。長くおつきあいしたいですし、思いは自分の手でつづりたい。メールは使いますが、ブログなどの顔も知らない不特定多数の人に向けて書くのは苦手です。小心者だからかなとも思いますが、知らない人に見られることに違和感を感じますね。誰に向けてのメッセージなのかは、とても大事だと思っています。」「(同上サイト)。小林さんがかかわった相手への優しい思い遣りが感じられる。自分と他者との関係性のなかで、手紙は信頼の絆を築くうえで有効なものであろう。そうだ、私@谷本も感謝の気持ちを手紙に書きたい!な。どうも、ありがとう。

***このコラムでは、読者の方からの投稿もお待ちしています。**

逸話と世評で綴る女子教育史(9)

黒田清隆の女子教育論と女子留学生

かんべ やすみつ

神辺 靖光(月刊ニューズレター同人)

明治のはじめ、いろいろな女子教育論がでるが、開拓次官・黒田清隆の女子教育論ほど奇抜で壮大なものはない。黒田は伊藤博文初代総理大臣の後を受けて第2代総理の椅子に座った人物で、晩年は生来の酒乱がたたって奇行が多く評判がよくないが、若い頃は薩長同盟に奔走したり、奥羽征討軍参謀として活躍したりした。箱館戦では敵将・榎本武揚の助命に奔走したり、北海道開拓に功績を揚げたりで、輿望を担ったものであった。次にあげるのは明治4年10月、黒田が北海道開拓次官の時、政府に上書したものである。

夫レ開拓ノ要ハ山川ノ形勢ヲ審ニシ道路ヲ通シ土地ノ美悪ヲ察シテ
牧畜栽培ヲ盛ニシ以テ生ヲ厚シ俗ヲ美スルニ在リ。然而テ之ヲ為スハ
人才ヲ得ルニ因ル。人才ヲ得ルハ教育ニ有リ。今ヤ欧米諸国能ク子弟
ヲ教育シ兒子未タ襁褓ヲ免レスシテ能ク菽麥ヲ弁ス。是他ナシ其母固
ヨリ學術アリテ幼稚ノ時ヨリ能ク其教育ノ道ヲ尽スニ由ルナリ。然ルハ
則チ女鬻ヲ設ケ女学ヲ興スハ人才教育ノ根本ニシテ一日モ忽ニス可カ
ラサルナリ。他日果シテ此鬻ヲ設ケ人材教育ノ基ヲ立ルハ今ヨリ幼年ノ
女子ヲ撰ミ欧米ノ間ニ留学セシメ其学資ハ当使定額中ヨリ之ヲ措弁ス
ヘシ(「開拓使事業報告」明治18年大蔵省刊)

黒田が開拓次官になると政府は黒田に欧米の開拓事業調査を命じた。黒田は勇躍、調査に出かけ、往復、米国を通過した。そこで彼は活発で教養のある多くの女性に出会った。`これだ`と直観した黒田は、当時弁務使とし

てワシントンに滞在していた同郷の森有礼を尋ね、まず森に、「米国婦人を嫁に貰え」と強要し、次いで日本の少女を米国に留学させようと提案した。森は嫁の件はことわったが、日本人少女の留学には賛同した。そこで、帰国後、政府に上申した文が上掲のものである(吉川利一『津田梅子』による)。

この文は、「開拓ノ要ハ」ではじまる。今や新しい事業を起すには人材を得なければならない。日本には人材が少ないが欧米には多い。それは子どもの頃の教育がよいからである。子どもの教育がよいのは母親に学問があつて教育熱心だからである。ゆえにわが国はすぐにも、よき母親をつくるために女学校を設けねばならず、また欧米の女子教育を見習うために少女の留学生をかの国に送らねばならない。大方、こんな論法であろう。

まず日本の少女を欧米に留学させる。少女達が欧米のすぐれた教育を受け、教養ある婦人となって帰国し、母となり、女教師となって子どもを育てれば日本人は人材となって働くから日本の開拓は進み、豊かな美しい国になる。こんな夢想的ではあるが、想大な計画である。

この上申書に岩倉が賛成したので、ここに日本初の女子留学が決った。早速、留学希望者を募ったが、なかなか集まらない。それはそうだろう。まだ汽車も通らない日本で国内旅行もしたことがない日本の娘を海をへだてた外国へ勉強させようとする親があるだろうか。5人の女子留学生在が横浜をたつ時、「鬼のような親の顔が見てみたい」というささやきが見送る群衆に洩れた。それでも5人の女子留学生在が決った。明治5年の「新聞雑誌」22号に次の記事がある。

アメリカ

今般黒田開拓次官周旋ニテ女学生五名 亜墨利加国留学トシテ同

ニユヨルク

国全権公使デロングノ妻ニ託シ十一月十二日横浜出帆 紐育 府へ差
レリ

其ノ人員ハ

東京府出仕 吉益正雄娘 亮子 十六歳

静岡県土族 永井久太郎娘 繁子 十歳

東京府土族 津田仙弥娘 梅子 九歳

青森県土族 山川与十郎娘 捨松 十二歳

外務省中録 上田駿娘 梯子 十六歳

右ノ者同月九日宮内省へ召セラレ皇后ノ宮ヨリ茶菓並紅縮緬壹匹宛下シ賜り左ノ御書付御渡アリタリ 其方女子ニシテ洋学修行ノ志誠ニ神妙ノ事ニ候 追々女学御取建ノ儀ニ候ヘハ成業帰朝ノ上ハ婦女ノ模範トモ相成候様心掛日夜勉勵可致事

上記5人の家はすべて戊辰の戦いで官軍の攻撃を受けた者である。会津藩士・山川与十郎が青森県土族となっているのは会津落城後会津土族はあげて斗南に移住させられたからである。この山川捨松の長兄・山川浩は動乱の激動と戦いながら高等師範学校長となり、次兄の山川健次郎は白虎隊の一員であったが、イェール大学に学び、後、東京、京都、九州三つの帝国大学総長を歴任した。上田駿は幕臣で早くも新政府に仕えたが、明治5年には東京築地萬年橋に上田女学校をたて、外国人教師を雇って英語を教えている。幕臣・津田仙は幕末に渡米し、彼地の農業を調べ、東京麻布に学農社をおこし、また「農学雑誌」を発行して欧米の農業を扱った人物として知られる。かように女子留学生の親兄弟は官軍に攻められた敗北側の人々で、明治になって欧米の知識で文化活動を行った人達であった。

随行者の中には福地源一郎のように佐幕反官軍の論陣を張った新聞記者もいる。天下の暴れ者を集めたと言われる。全権大使・岩倉具視、副使、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、山口尚芳等は戊申戦争官軍の首脳。また、華族子弟の留学生もいる。この一行に5人の少女留学生が加わって、パ

シフィク・メール・ライン社のアメリカ号は横浜港を出発した。時に明治4年11月2日、この日の乗船の乱雑さ、無秩序さを久米邦武は『米欧回覧実記』に記録し、司法大輔・佐々木高行は「外国人に見られて恥かしい」と『保ほここひろいい古飛呂比』に書いている。

人はいかにして、人たり得るのか!(そのII)

—作家文人・タレント・俳優の回顧談(上京物語)から—

たにもと むねお

谷本 宗生(大東文化大学)

作家の江上剛さん(1954年～)は、丹波から上京して早稲田大学に入り、卒業後は銀行員として働き、49歳で作家デビューを果たした人物である。江上さんいわく「人が人であり続けるためには『哲学をする』ということが重要になってきます。」(江上剛『50歳からの教養力』2014年、5頁)「それは日々何かを思考するということです。仕事、友情、人間関係、両親のこと、スーパーの売り出しなど、日常に起きるいろいろなことの意味、役割、影響など、どんなことでもいいと思います。それらを思考することが『哲学する』ということです。」(同上書、6頁)「日々の問題を『哲学する』ことで『教養力』を身につけ、『生きる力』を蓄えていた」(同上書、7頁)「『哲学する』ことは、立ち止まって思考しなければなりません。時間もかかります。」(同上書、8頁)。そして、「学生時代」に「何かの役に立つのか、将来役立つのかどうか、などとは考えない」(同上書、23頁)で、読書に耽ったという。

ドストエフスキーやバルザック、チャーホフやプーシキンらの全集を、何日も大学に行かずに下宿に籠って読んでいたよし。「腹が減ったら炊いたご飯を食べて、また読む。眠くなったらその場で眠って、起きてまた読む。」(同上

書、21～22頁)。そんな学生時代、反戦デモに参加した江上さんは、中央線沿いの清水谷公園にて寝転がってバルザックの『従妹ベツ』を読んでいたところ、機動隊員がそこにやって来て「何を読んでいる?んだ」と詰問するので、同上書を見せたところ、エロ本?の類と勘違いしたのか「君たち学生はそういう類の本を読んでいてくれていいんだ!」と。そこで、江上さんはバルザックの解説をして「こういう本を読んでいると、皆さんと戦う気力が沸いてくるんです」(同上書、22頁)と皮肉を交える。学生時代に親交をもった井伏鱒二先生から、弟子といわれる太宰治に語ったように江上さんにも口酸っぱく「古典を読め」と強調されたという。「僕[井伏]なんかの作品を読んじゃいけないって注意したんだ。古典[プーシキン他 19世紀ロシア文学]を読めってね」(江上剛「私の東京物語」第5話『東京新聞』2015年7月8日)。大学学生課で、賃料が安い物件を東久留米市にみつけた江上さんは、「大学から離れていることが魅力だった。勉強[読書]するためには孤独が必要だ。」(江上剛「私の東京物語」第2話『東京新聞』2015年7月3日)と考え、その街にあった山本書店にて「ある時払いの催促なし」で全集を数多く入手し読書三昧出来て学生時代は幸せであったと感謝している。

また大学でのサークルは、誘われるがまま民俗学研究会に入会する。地方の祭りや伝承の調査にしばしば出かけたという。東久留米の下宿近くに幼稚園があり、江上さんは民俗学研究で採集した昔話や伝承を基に、自分で新作の童話を作りイラストも添えてよく子どもらにプレゼントしていたことも、「書く」行為の原点ともいえるかもしれないと回顧している。

タレントの大久保佳代子さん(1971年～)は、千葉大学卒業後OL生活を兼業しながら幼馴染みの光浦靖子さんとお笑いコンビ「オアシズ」で芸能活動を続け、39歳でタレント業によく専念する。大久保さんいわく「私って常に『スティ』状態。…『自分から発言しない、自分から動かないは、結局、

責任を問われないずいポジションにいるってことだからね』…ぼちぼち私も変わっていきたい…。兎にも角にも、私は、光浦さんを始め周りの人間に恵まれ、周りの力に動かされ現在に至るわけです。流されて今の状況にあって、私ってなんて強運な人間なんだろう。よし、こうなったら強運をいいことに、今度もいい具合に流されていきます。ステイし続けますから。誰かおやつをください。健康な大人は嫌でも働かなきゃダメなの!!」(大久保佳代子『美女のたしなみ』2014年、169～173頁)。1980年代、中学生の大久保さんは「ビートたけし」さんの熱狂的なファンであったという。たけしさんのギャグなどを教室でもしばしば連発していたためか、男子学生らから憎悪に近く嫌われていたと。「でも全然へっちゃらです。だって、たけしに比べたら本当つまらない、ちんかすのような男ばっかでしたから。」(「趣味と言っても」『恨みそぞい』第7回、2006年2月15日)。そんなさ中、フライデー襲撃事件でたけしさんが逮捕され、中学生の大久保さんが取った行動は。「瞬時に『助けてあげたい、私に何ができるのだろう』と考えました。で、どこからか『嘆願書』を裁判所だけに送ると罪が軽くなるという情報を手に入れました。中学生が嘆願書なんて知るはずもなく、図書館で調べました。数が多ければ多い程、効果があるらしい…。自分はもちろん、クラスメートにもお願いし、さらに、違うクラスのそんなに知らない人にまで書いてもらいました。各教室を、ノートと朱肉を持って真剣に説明して回りました。『たけしにだってプライバシーがあるのよ。それを無視してこれは不当逮捕なの。あの人を助けたいから、ここに名前、住所、拇印をお願いします!』拇印って…。拇印を押させるなんて今考えると大変なことですよ。でも、相手も田舎の無知な中学生。『拇印? いいよ〜』即快諾でガンガン押してくれました。結局100人近く集め、きちんと裁判所だけに送りました。」(「趣味と言っても」)。そんな当時の自分を、大久保さんは「なんて無知で馬鹿で純粹だったんでしょ。」と照れながら、「あの時に、情熱を使い果たしてしまったのかもしれない。」(「趣味と言っ

も)」と語っている。

W 浅野の 트렌ディードラマ「抱きしめたい!」に憧れ、渥美半島の風光明媚な地元で育った高校生の大久保さんは、「この土地を脱出し、東京でのキラキラライフをなんとかしてでも送りたい、という思いがマックスに。」(大久保佳代子「私の東京物語」第1話『東京新聞』2015年5月27日)なり、大学受験のため必死に受験勉強に励んだという。笑。その甲斐もあって、千葉大学に入学することとなる。彼女いわく「『千葉って言っても東京の横だし、東京ディズニーランドって千葉にあるから、千葉も東京ってことだよ』と無理やり自分を納得させて。」(大久保佳代子「私の東京物語」第2話『東京新聞』2015年5月28日)。でも流石に、ずっと生活していた親元を離れたことで、「独り暮らし最初の一カ月は、死ぬほど寂しかった。毎夜、狼の遠吠えのごとく泣き、寂しさを紛らわすために食べた。で、太った。ソバージュの髪形も手伝ってかミッキー吉野さんみたいになった。おじさんまっしぐらの女子大生時代。」(「私の東京物語」第2話)と語っている。大笑。大学ではスカッシュサークルに入部し、女子グループには「媚びまくり」千葉ライフを相応に謳歌していたという。ある時、地元三河の同級生らが上京して来て、大学のサークル仲間と一緒に食事することになり、事件?が。三河の同級生らは大学生の大久保さんに対して、「何気取っとる?カバ[地元でのあだ名]のくせに」「カバ子のつまみは、キャベツ丸ごとでいいだら?」(大久保佳代子「私の東京物語」第3話『東京新聞』2015年5月29日)と半ば説教。それをみたサークル連中は、予想どおり思い切り引いている。そのこともあってか早晩、大久保さんはサークルの女子グループから仲間外れとなったよし。そのことについて、大久保さんは「後に[入学して]イケているはずの女子達も栃木県や長野県や福島県出身で、こぞって田舎もんだったことも判明。仕方ないかな、上京当初は、全員いきがっちゃうもんだよね。」(「私の東京物語」第3話)と語る。大久保さんの経験した青春期は、甘酸っぱさ?とほろ苦さと可笑

しさが溢れている。人間味あるお笑い芸人としての本質的な魅力@タレントとして、それはよく滲み出ていると思う。

俳優の堺雅人さん(1973年～)は、宮崎から上京して早稲田大学に入り、家賃も安いため市ヶ谷にある宮崎県の学生寮で生活したが、訛りのない演劇を行ううえで意識的に寮生らと話すことを避けたという。「深夜にこっそり帰ってきて、翌日だまって出てゆく生活がしばらくつづき、二年後、市ヶ谷のリトルミヤザキをあとにした。」(『文・堺雅人』2013年、51頁)と語る。そもそも上京して、俳優になりたい!願望は当初希薄?であったという。「国立大学に進んで官僚になるのが希望でした。ところが国立は全部落ちて、受かったのがたまたま早稲田大学だったんです。私学だから、普通に就職するか、教員免許を取って先生になる将来像を漠然と描いたりしました。」(インタビュー「本当は官僚になるはずでした」『婦人公論』2005年7月号)。ところが上京して大学に入り、演劇の道に本格的に没入して、遂に大学も中退することになる。「実際には大学と両立もできたんですが、なにしろ“出家”していたので(笑)、授業なんか出てたまるかという思いがありました。予想どおり中退したのは、三年生の春です。家族には一切相談せずに、実家に帰ったとき、『大学に退学届を出しました。すみません』と一方的に事後報告をしただけ。…その後[実家とは]七、八年間、絶縁状態が続きました。」(「本当は官僚になるはずでした」という。「自分でも運がいいと思いますね。小劇場には古田新太さんや生瀬勝久さんといった素敵な俳優たちが集まっていて、次の世代は誰だって探していたときに、ちょうど僕が居合わせた。先輩たちが一所懸命切り開いた道を通らせてもらった気がしています。」(「本当は官僚になるはずでした」と、堺さん本人は幸運であったと語っている。NHKの大河ドラマ「新撰組!」で、山南敬助の役を演じたことが大きな契機となったという。「収録が始まる前、(脚本家の)三谷幸喜さんから『山南は、日芸(日大

芸術学部)の劇団に客演としてやってきた早大劇研の人、という感じでやってください』と言われたんです(笑)。三谷さんは日芸卒ですけど、日芸の劇団は、楽しければいいじゃないかという集団だと評価されていて。一方、早大劇研は、みんなムチャクチャ俊敏で、『スタニスラフスキーはね…』といった堅い演劇論を、すぐしそうな奴らだってイメージがあったらしいです。三谷さんが考える山南は、日芸の劇団にやってきて、演劇論を滔々と語り、演出家にも『そこは違うんじゃないですか?』と意見をし、若い女優をボーッとさせる。…そんな早大劇研の男だと。そのとき、三谷さんは僕が早大劇研出身だと知らなかったらしいですが(笑)。「(本当は官僚になるはずでした)」。普段の生活については、「当たり前」な感覚がやはり非日常的な?演劇を行ううえでも大事だと思い、「休日の過ごし方は、午前中に本屋へ行き、好きな本を見つけ、喫茶店でだらだら過ごして、おなかが減ったら家に帰ってご飯を食べて、寝る。」(「本当は官僚になるはずでした」)ようにしていると語る。また映画「ジェネラル・ルージュの凱旋」の撮影の合間に、司馬遼太郎さんの「坂の上の雲」を読んだ堺さんは、「軍という組織には、秩序や規律という、『平時』のアタマとおなじくらい、独創や臨機応変といった、『戦時』のアタマが必要なのだろう。…両者はバランスが大事なのだ。…秋山真之の戦術論だが、役者の心得としても通用しそうである。『軍人』『救急医』『俳優』には共通点があるのだろうか。なんだかそれは独創、柔軟、適応といった『戦時』的ななにかのような気もするのだが、あわただしい撮影現場では結論をだす余裕はない。」(『文・堺雅人』305~307頁)として、撮影が終わってからまたいつもの如くゆっくりいろいろ考えをめぐらせたい!と述べている。役者として情熱的でストイックな一面と肩肘張らない普段着な姿勢を併せ持つ俳優@堺雅人さんの生きかたがよく分かる感じがしてくる。十倍返し!などって突然ブレーク?したのではないだろう。

大阪市の女子教育① 女子教育と家政学

—大阪市立大学生活科学部に着目して—

とくやま りんこ

徳山 倫子(京都大学大学院)

戦後の学制改革により、それまでの男女別系統の教育体系は廃止され、女性が大学に進学する道が大きく開かれることとなった。制度上は性別による制限がなくなったが、自然科学系学部や経済学部は男子学生の方が多く、文学部は女子学生を多く集めるといった、学部選択の傾向には今日においても性差が見出されている。そのなかで新制大学発足当初から、女子向けの分野として設置されていたのが家政系学部・学科であった。当該分野を扱う学部を開設する女子大(短大を含む)の増設は女子の大学進学率の上昇に寄与したが、その背景には家庭を担う女性と外で働く男性といったジェンダー観があり、戦後の女子高等教育は制度と内実の関係に矛盾を孕みながら拡大することとなった¹。

それから数十年が経過し、サラリーマンの夫と専業主婦の妻を標準とする家庭像を当然視しなくなってきた今日においては、かつてのジェンダー観は崩壊しつつあるとも考えられる。しかし、卑近な例では、自然科学系学部を選択する女性を「リケジョ」と呼んで珍しがるといった視線が存在していることなど、高等教育ならびに学術研究の領域におけるジェンダーの問題はまだまだ根深く残っているように感じる。また一方で、中学校・高等学校における家庭科の男女必修が開始されてから20年が経過しているが、非婚・晩婚化、高い離婚率、夫婦共働きなどといったライフスタイルの変化に伴い、衣食住に無関心ではいられない、或いは積極的に関心を持つ男性が増えてきていると思われる。この局面に家政学ならびに生活科学がいかに対応するのは、当該分野に課せられた課題であると言えるだろう。

これらの事柄は、歴史的には以下の2つの文脈で描くことができると考え

られる。1 つ目は女性と教育についてであり、旧制度下において女性が当然学ぶべきものとされてきた「裁縫」・「家事」といった学科目が、女性だからという理由で学ばなければならないものではなくなくなっていき、他の分野を学ぶことに時間を割く女性が増えていくという過程である。2 つ目は家政学という学問についてであり、旧制度下において女子教育として不可欠な学科目であった「裁縫」・「家事」が家政学という学問領域となり、特定の性別のみを対象とするものではなくなくなっていく過程である。両者は不可分なテーマであり、そのため現在に至るまで接点が曖昧にされたまま認識されているようにも感じるが、高等教育への門戸が男女平等に開かれ、かつ家政学が女性だけのための分野ではなくなりつつある現代において、女子に課されてきた家政教育と、そうでない分野の教育の双方の意義について再考することは、今後の高等教育とジェンダーのあり方について問うことに繋がると筆者は考えるのである。

ここで新制大学発足時に開設された家政系学部・学科に目を向けると、これらは東京・奈良の女子高等師範学校や、日本女子大学等の公私立女子専門学校、すなわち旧制度下において女子高等教育を担った学校を前身として設置されており、大半が女子大学の学部・学科として開始されたものであった²。そのなかで唯一 1949(昭和 24)年に男女共学の家政学部(現在は生活科学部と改称)を設置した大阪市立大学も例外ではなく、大阪市立女子専門学校を前身として設立されている。同大学生活科学部のホームページに掲載されている沿革を以下に掲げてみよう。

- 1921(大正 10)年 4 月 大阪市西区高等実修女学校として創立。
- 1924(大正 13)年 4 月 大阪市立高等西華女学校と改称。
- 1925(大正 14)年 4 月 家政高等科 3 年課程設置。
- 1941(昭和 16)年 3 月 大阪市立西華高等女学校と改称、家政高等科を

専攻科と改称。

- 1948(昭和 23)年 3 月 大阪市立女子専門学校を設置、専攻科を廃止。
1949(昭和 24)年 4 月 学制改革により大阪市立大学家政学部となり、
食物学、被服学、住居学、児童学、社会福祉学の
各専攻を置く。

(後略)³

これによると同校が女子専門学校となったのは戦後の 1948(昭和 23)年のことであり、それまでは高等科や専攻科を設置する女子中等学校として存在していた。女子中等学校の高等科や専攻科を母体として女子専門学校が設置される例は他にもあり、たとえば私立大阪樟蔭女子大学も、1917(大正 6)年創立の樟蔭高等女学校に設置されていた専攻科・高等科が 1926(大正 15)年に廃止され、それと同時に設立された樟蔭女子専門学校が戦後に女子大学となった⁴。近代日本の女子教育について検討するにあたっては、高等教育よりも早い段階で拡充された中等段階の学校の展開やその教育内容について明らかにすることは重要なことであろう。

大阪市立大学家政学部の前身校は、1921(大正 10)年に設置された大阪市西区高等実修女学校から大阪市立高等西華女学校という学校を経て、1941(昭和 16)年に大阪市立西華高等女学校になっており、組織変更を繰り返してきたことが判る。(さらに筆者は、同校における女子教育の源流は 1908(明治 41)年に設置された西区女子手芸学校まで遡ることができる⁵。)同校が女子中等教育史における先行研究の主役を飾ってきたともいえる高等女学校になったのは 1941(昭和 16)年のことであり、それまでは別種の学校として存在していたのであるが、このような高等女学校ではない女学校については、これまであまり研究が進められてこなかった。しかし、これらの学校は制度的には異なる学校であっても、学校運営上は高等

女学校の影響を強く受けており、近代日本の女子教育は複雑な階層性を伴いながら歴史的変遷を遂げたのである。

次回からは、複雑な変遷を遂げた末に戦後に新制大学の一学部を形成するに至った大阪市立大学家政学部の前身校を中心に、大阪市の女子教育について検討したい。具体的な事例から、高等女学校に一元化されない女学校のあり方を示し、多角的に近代日本の女子教育について捉えることができれば、と考えている⁶。

¹ 小山静子『戦後教育のジェンダー秩序』勁草書房、2009年。

² 木本尚美「わが国における家政学の制度化過程—学問的發展の特徴—」『高等教育研究』8、2005年、214頁。

³ <http://www.life.osaka-cu.ac.jp/outline/history/index.html> (2015年9月8日閲覧)。

⁴ 樟蔭学園(編・発行)『樟蔭学園80周年記念誌』1997年、9頁。

⁵ このように考える根拠については次回以降、具体的な史料を用いて述べることとする。

⁶ 筆者はこれまで、大阪府の郡部における女子教育について検討し、その成果を「1930年代の公立職業学校における女子教育—大阪府立佐野高等実践女学校を中心に—」(教育史学会第58回大会口頭発表、2014年10月)、「都市近郊農村における女子初等後教育の展開—大阪府郡部の高等小学校付設裁縫専修科に着目して—」(『農業史研究』49、2015年3月)において発表してきた。筆者にとってこのニューズレターは、論文化の目処が立っていない市部の女子教育について、収集した史料に基づいてまとめてみようという試みでもある。

新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道

第9回 学校沿革史にみる補習科・専攻科(5):福岡県(5)

よしの たけひろ
吉野 剛弘(東京電機大学)

前号では、福高研修学園と鞍陵学館の教員について検討し、補習科を設置していた高等学校との関係をみた。今号では、修猷学館の教員について検討する。

修猷学館については、その設置者である修猷学園が、『修猷学園5年史』、『修猷学園10年史』、『修猷学園15年史』、『修猷学園30年史』を刊行している。このうち、5年史と10年史には教科ごとの教員一覧があり、教員の履歴についても触れられている(15年史と30年史には担当者と担当年度のみが掲載されており、他の資料との照合する必要がある。詳細な検討は他日に期したい)。それらをもとに修猷学館の教員をみていきたい。

前号の鞍陵学館のように全教員の着任時期等を示すことは可能なのだが、膨大な量に及ぶため、ここでは教員の所属の人数と割合を示すことにする。教員構成は表1の通りである。

表1 修猷学館の教員構成

	外部講師	専任教員	修猷館教諭
1965(昭和40)	3(12.0)	0(0.0)	22(88.0)
1966(昭和41)	2(6.5)	1(3.2)	28(90.3)
1967(昭和42)	2(7.7)	1(3.8)	23(88.5)
1968(昭和43)	4(13.3)	3(10.0)	23(76.7)
1969(昭和44)	2(6.3)	3(9.4)	27(84.4)
1970(昭和45)	3(7.9)	4(10.5)	31(81.6)
1971(昭和46)	4(11.1)	4(11.1)	28(77.8)
1972(昭和47)	4(10.3)	4(10.3)	31(79.5)
1973(昭和48)	3(7.5)	4(10.0)	33(82.5)
1974(昭和49)	8(18.6)	5(11.6)	30(69.8)

表2は、1970(昭和45)年、1974(昭和49)年段階の教員一覧である。
 なお、表中の●は外部講師(修猷館の現職教員でない者)、◎は修猷学館
 専任の者である。

表2 1970(昭和45)年・1974(昭和49)年の講師一覧

1970(昭和45)年	
英語	●永島計次、●町井彦四郎、◎引野英夫、中山憲二、吉村三生、泉広哲彦、小山勉、大野邦博、大藪 勉
数学	●松崎 衛、◎岸川政道、内田光一、金山靖夫、池 元治、安東治、小西直行
国語	◎小枝 功、◎山北敏夫、柴田穂積、藪 敏也、花田嘉博、小柳陽太郎、山本哲也
理科	石田清房(物理)、柴田本基(物理)、田河哲郎(化学)、渡辺暢平(化学)、尼川大録(生物)
社会	児島敬三(日本史)、篠原 進(日本史)、平田美光(世界史)、伊東美夫(世界史)、長野 寛(地理)、庵原義夫(政治経済)
体育	金広 博、淵本武陽、北島康令、奥田義郎

1974(昭和49)年	
英語	●永島計次、●林秀武、●町井彦四郎、◎引野英夫、中山憲二、吉村三生、泉広哲彦、小山勉、大野邦博、大藪 勉
数学	●平川吉一、●野副虎夫、●中野惟孝、●吉安余羽、◎岸川政道、内田光一、安東 治、武内(小西)直行、中村堅市、小森成彬
国語	●高崎為弘、◎小枝 功、◎山北敏夫、柴田穂積、花田嘉博、牧野正利、中村太次郎、矢島徹三
理科	◎石田清房(物理)、渡辺暢平(化学)、瓜生正蔵(化学)、尼川大録(生物)
社会	児島敬三(日本史)、篠原 進(日本史)、平田美光(世界史)、伊東美夫(世界史)、長野 寛(地理)、庵原義夫(政治経済)
体育	淵本武陽、奥田義郎、白木英治、白川昌弘、加来野靖

外部講師でも専任教員でもない者はすべて修猷館高等学校の教員であるから、修猷学館の講師のほとんどが修猷館高等学校の現職教員である。修猷学館は少なくとも創立後の10年間は、修猷館高等学校本体と不即不離の関係にあったということなのである。

しかし、修猷学館のような各種学校が設置されたのは、高等学校の内部

にあった補習科を切り離すためだったのである。その点を考慮すると、設立後 10 年近くも補習科と大差ない状況を維持していることに注目すべきである。

さらに教員の担当教科を見れば分かるように、修猷学館には「体育」の授業が含まれている。なお、『修猷学園 15 年史』をみると、体育の他に美術の教員もいることが分かる。予備校という場で、運動・レクリエーション的な行事が行われることは珍しいことではない。しかし、ここでは正規の授業として含まれているのである。体育の授業が運動不足になりがちな生徒への対応ということなのは容易に想像できるが、現職の高等学校の教員を招聘してまで実施する必要があるのかという疑問は残る。

では、このような状況はいかなる理由で生起するのか。そもそも修猷学館は、「大修猷館」という考え方のもとに設置されているのである（『修猷学園 5 年史』p.11）。修猷館高等学校もその一つにすぎないということになるから、修猷学館と修猷館高等学校が不即不離なのはむしろ当然でもある。事実、修猷学園は修猷学館のみならず、高校受験対策の機関として能力開発研究所というものも新設している。修猷館は上に延びただけでなく、下にも延びているのである。

また、創立 5 周年にあたり、当時の校長である重藤市之丞は、修猷学館は「単なる大学受験予備校ではなく、「永続性のある広大な教育理想をもつべき」とし、「自習会の延長や補習科の延長ではない」と語る（『修猷学園 5 年史』, p.5）。ただの予備校ではないのだから、一般の予備校にはない体育の授業があってもそれほど奇妙ではない。

単なる予備校ではない、総合学園のような「大修猷館」の構想の淵源は何か。そこで持ち出されるのは黒田藩学修猷館の伝統である。そのような伝統を守り、崇高な理想の実現のためにはどのような人材が求められるかとなれば、教科内容や受験情報に詳しいだけでは務まらないということになる

のであろう。「大修猷館」を支えるにふさわしいのは、修猷館関係者を置いて他はないからである。

〈資料紹介〉立教大学における戦後資料

一『立教大学新聞』にみる学生運動(4)一

たなか さとこ

田中 智子(立教大学立教学院史資料センター)

前号まで3回にわたって、戦前期の立教大学における学生運動を紹介してきた。今号からようやくタイトル通り、『立教大学新聞』等にみる戦後学生運動関係記事を紹介していく。『立教大学新聞』は前号で述べた通り、1933年に「不幸な事情のため廃刊されてしまった」¹が、その後1941年10月1日に再刊第1号が発刊されている。戦時下においてもその刊行は続いていたようであるが、現在立教大学図書館に保存されているものは、1943年11月25日発行の第24号の次が1946年7月24日発行の第36号となっている²。

その間の学生運動関係の出来事について知ることの出来る数少ない資料の一つとして、「立教大学再建へ 学生大会も支持す」という『朝日新聞』1945年11月2日発行の記事があげられる。この記事の内容は、「連合軍最高司令部の命令によつて総長三辺金蔵氏ら十一名の罷免を見た」³後、「大学部、予科、理科専門学校の教授団が学内における信教の自由、学内民主々義体制の確立、学生の自治と福利の制度化など五項目を挙げて」理事会に提出し、学生大会もこれを支持したというものである。

一方、現存する『立教大学新聞』の中で、戦後初めて学生運動関係の記事が大きく取り上げられたのは、1949年2月1日発行の第56号のトップ記事「吹き狂ふ反動の嵐 理由はあいまい 杉本教授問題表面化す」

である。以下、同記事の一部を引用する。

理専教授の不当かく首問題は、その後組合員の中にも、学生の中にも大きな反響をよびおこし、組合、理専学生の間には、杉本委員長、藤崎講師、星栗林両助手の留任運動に立上ろうとする空気があらわれた、その後の経過は次の通り

既報組合大会後、組合委員会は理専杉浦主事と会見、杉本教授以下の首切りの理由をただした。問題の焦点は委員長たる杉本教授の首切りで、杉浦主事は最初杉本教授の大学教授の資格を云々したが、組合側の反証によつて、資格のあることを承認、結局杉本教授に対しては、学部長会議に何かもやもやした空気があつて、杉本氏はやめてもらうことになつたと述べた十二月十五日の組合再度の大会では、資格のあるものを明確な理由もなく単に気分次第で首切るとは何事かというような強硬な発言もあり、組合大会は学校当局のかく首理由を不当とし、杉本委員長以下の留任の要求を決議すると共に、この問題に対する組合委員会の強硬な態度を要望した

この「杉本教授問題」とは、戦時中に設けられた立教工業理科専門学校（理専）が新制立教大学文理学部⁴へ再編されるにあたって、杉本教授が不採用となったことを「不当かく首」として教職員組合および学生が抗議運動を行ったというものである。以上の2つの記事を見る限りにおいては、いずれも教職員（組合）主導の運動であり、学生はそれに追随するという形式をとっているように見受けられる。またこの時期、教育復興闘争と呼ばれる全国規模の学生運動が起っており、多くの大学でストライキに突入し、その中で全国学生自治会総連合（全学連）が結成されていたりするのであるが、立教大学の学生自治組織がそれらに参加したという形跡は見られない。

なぜ立教大学の学生は全国的な学生運動に参加しなかったのであろうか。学内問題にしか関心を持たなかったのであろうか。その答えにつながる記事が、1950年7月1日発行の同新聞第70号に見られる。学生運動に参加し、占領政策違反で軍事裁判にかけられたことで、学生が除籍・停学となったことに対する、佐々木順三総長の声明文である。

五月三十日の不祥事件に本学々生の間から数名の関係者を出した事はまことに遺憾である。

本学においては学生会が全学連に加入する事を認めていないので学生は如何なる資格においても全学連の指導下に行動する事は容認されないはずである。又唯物論的世界観に立脚して社会秩序の建設を企図する共産主義運動は、基督教の世界観に立つ本学の教育方針と相容れぬものがあることは、従来いろいろの形式で学内に発表されているのである。従って本学教職員、学生は本学の方針に反する事なしにこの種の運動に参加することは出来ないのである。⁵

戦時中、立教が文部省や学内のキリスト教排撃運動などによって、少なくとも表面的にはキリスト教主義を放棄することになったことは、前号で述べた通りである。それが戦後、GHQの介入や前述の学内民主化運動によって回復されたのであるが、皮肉にもそのキリスト教主義が学生運動を抑圧していたのである。

しかしながら、大学当局のこういった抑制・抑圧にもかかわらず、学生運動に参加する学生はその後も出てくる。これについてはまた次号以降に紹介する。

*資料に関するお問い合わせは、田中 (s.tanaka@rikkyo.ac.jp) まで

1 小山栄三「学生新聞に就て」(『立教学院学報』第1号、1940年1月28日付)

2 立教大学図書館デジタル・ライブラリー
(http://library.rikkyo.ac.jp/digitallibrary/rikkyonews/rikkyo_news_3.html)

3 詳細は本ニューズレター第1号の拙稿を参照されたい。

4 同記事が出た1949年2月初旬の段階では文理学部の構想であったが、実験施設の不足等から認可保留となった。その後文系学科と切り離し、教員を増員するなどして同年3月25日、理学部として認可されている。

5 「全学に告ぐ 佐々木総長」(『立教大学新聞』復刊第70号、1950年7月1日付)

近代日本における大学予備教育の研究⑨

—東京商科大学の学科課程に注目して—

やまもと たけし

山本 剛 (早稲田大学大学院)

はじめに

前号までは、早稲田大学や慶応義塾大学の私学を事例として、それらの大学予科の学科課程やその教育理念について考察した。そこでは、とりわけ大学予科の教育と学部の特設教育との関係が注目された。周知のように大学予科は高等学校高等科(旧制高校)と制度上同等であり、「高等学校令」及び「高等学校規程」等によって規定された。しかし、慶應義塾では、経済学部、法学部進学希望者のための学科課程では「簿記」が設置されており、大

学独自の学科目も設置されていた。一方、早稲田では、「簿記」は設置しておらず、外国語の学科目に特徴があるほかは、高等学校規程に準拠した学科課程であった。また、両校とも大学予科の教育では、高等普通教育を重視した点においては一致していた。早稲田では、大学予科が「余りに大学の準備教育に傾くと分化と専門とに流れ」てしまい、高等普通教育が軽視されることを懸念し、大学予科の高等普通教育を機能させるために「専門ノ学門ノ匂ヒハ嗅ガセナイ」とまで徹底していたことも注目された。このことは慶応義塾でも同様であり、同大学塾長小泉信三の発言からも高等普通教育を重視していたことが明らかであった。

こうした状況をふまえ、大学予科の学科課程と大学教育との関係をさらに注目する意味で、本号では官立の商業系単科大学である東京商科大学を検討する。同大学では、後に検討するように1931(昭和6)年に予科廃止案をめぐって、いわゆる「籠城事件」がおこる。大学予科は大学教育のために極めて重要な機関としてその廃止案に反対するのである。このように大学予科を重視した同大学を検討することは本研究の課題である大学予備教育の歴史的特質を明らかにするために重要な意義を持つと言える。それでは同大学予科はどのようなものであったのだろうか。はじめに大学予科発足当時の学科課程を検討する。

1 東京商科大学予科の学科課程

1920(大正9)年に官立商業大学として東京高等商業学校が組織を変更して東京商科大学へ昇格し、修業年限3年の大学予科が設置された。1924(大正13)年の『一橋新聞』によると¹、それは高商時代の予科とは「色彩を異にして」、新たに「東京商科大学へ注ぐ正真流」として期待されたと述べている。さらに、同大学は「ビジネスマンを出すのを唯一の目的とせず、優れたる学究を養成する」のも「重大任務」であることから、そのための「揺

「前期としての予科時代」には「将来に於て一世の指導者たるべく基礎を築く」ために、「実務方面の事柄を仕込むと同時にそれ以上の注意を人格の完成と学究たるの素地を作る」として、大学予科の学科課程は「珠算其他の二三を除いては概して高等学校文科」と同じとされたと述べている。大学予科の学科課程編成は次のようになっていた²

このように東京商科大学予科の学科課程をみると、たしかに高等学校規程に準拠しているが、「簿記」や「商業通論」のように大学の専門教育のためと考えられる学科目が設置されていることが注目される。それは、先の慶應義塾の経済学部・法学部進学希望者のための学科課程よりさらに多数の学科目が設置されている。こうした東京商科大学の学科課程の特色を、同大学学長の佐野善作は東京帝国大学経済学部商業学科と比較して、次のように述べている³。

学科目／学年	合計毎週時間数	毎週時間数		
		第一学年	第二学年	第三学年
修身	3	1	1	1
国語漢文	漢文 4	2	2	
	作文及書法 4	2	1	1
	国語 [3]			[3]
第一外国語(英語)	26	10	8	8
第二外国語	4 [3]		4	[3]
歴史	8	(東洋史・日本史) 4	(西洋史) 2	(西洋史) 2
地理	4	2	2	
哲学概説	2			2
心理及論理	2			2
商業通論	2	2		
簿記	5		2	3
経済通論	4		2	2
法学通論	3		3	
民法総論	2			2
数学	3	2	1	
商業算術	3	(珠算) 1	2	
化学	2	2		
物理	2	2		
電気及機械工学	2			2
自然科学総論	2			2
体操	9	3	3	3
合計	99	33	33	33

東京商科大学は特設大学予科を有し其教科中に商業通論、簿記、商業算術、電気及機械工学の如き学科目あり又経済通論、法学通論、民法総論の如き学科目に於て高等学校高等科文科に於ける法制経済以上に大学教科の予備的智識を授くるを以て大学本科の学科課程に於て初めより稍深く専門に入るを得れとも東京帝国大学商業学科は高等学校の卒業生を收容するを以て其入学の初め当分は商業に関する一般的智識を授くるの要あるべし

ここで佐野は、東京帝国大学は専門教育を学ぶにあたり、商業一般の知識がない旧制高校卒業者を收容することで、当分その基礎的な知識を大学で習得させる必要があると指摘し、一方で東京商科大学では、「大学教科の予備的智識」をすでに大学予科で行うので、大学の専門教育の質が高いというのである。すなわち、東京商科大学予科ではその発足時には、たしかに旧制高校の文科に準拠しながらも実際は大学の専門教育のための学科目を設置することに特徴があった。

しかしこの後、同大学では大学予科の学科課程をめぐってその改正が求められ1934(昭和9)年より新たに編成されることになる。次号では、先に述べた「籠城事件」を中心に取り上げながら、改正された大学予科の学科課程を検討する。

¹「予科小史」『一橋新聞』(大正13年11月1日)。

²『東京商科大学一覽 自大正九年至大正十年』(東京商科大学)。

³佐野善作『日本商業教育五十年史』(大正14年 東京商科大学) 127頁～128頁。

旧制中学校生徒の伝統とスポーツ

つつみ

堤 ひろゆき(東京大学大学総合教育研究センター)

前回のニューズレターで予告したとおり、2015年8月23日に、松本市の旧制高等学校記念館・旧制高等学校友の会主催の第20回夏期教育セミナーにて発表の機会をいただいた。様々な方々から議論を通して助言や示唆をいただき、幸甚である。いただいたコメントによって、今後さらに改善を期すところではあるが、感謝の意を表すために、本号では発表に当たって最も注力した部分と全体のまとめを抄録したい。

前回では、松本中学校の初代校長の下での野球について論じた。本号では、第2代校長の下での野球と、その変化について論じる。

校長の交代にともなう野球部選手の廃止と「復活」

1914年、初代校長は現職のまま死去する。後任の校長は、小林校長とは大きく異なる路線で生徒に接したようである。第二第校長に対しては排斥運動が起こる程に生徒との間に軋轢が生まれていたが¹、野球についても強硬な意見を有していた。

長野県の中学校においては、「野球が中心である聯合運動会は、教育上弊害となる」という意見が次第に強くなり、1915年には、ついに聯合運動会の中止に至る²。「野球害毒論争」の影響が見て取れる。1916年には長野県中等学校長会議において、「中等学校聯合運動会復活の可否」がとりあげられた³。このときの松本中学校校長は聯合運動会の弊害を主張する校長の一人であった⁴。松本中学校は、1915年の二学期に、校長の意見もあって野球部選手を廃止する⁵。廃止後一年経過した『校友』には、「野球部選手なるものを恨みを呑みて廃してより既に一年と相成申し候。松中の清華

と歌はれ申し候野球部を纒(わづか)に緞マツチに止めより既に一歳を経過致し候」⁶と言及されていることから、少なくとも『校友』誌上では野球部の選手廃止は望まれていなかったという意見がでていいる。

野球部の選手廃止は長く続かなかつた。1917年に第2代校長が退任すると、1918年4月には野球部復活が生徒により可決される⁷。これによって同年5月には松本中学校野球部の選手制度は復活した。

第2代校長による野球への姿勢と野球部の選手廃止は、松本中学校における野球と「校風」との関係に大きな影響を与えた。先に述べたとおり、初代校長の時期には、校長のもとでの「校風」と野球とが、校長によって体现されていた。第2代校長は、初代校長によって許容されていた校内での各種の「自治」活動を管理するため、1915年には校友会を設置するなどして生徒の活動への関与を強めた。松本中学校においては、「校風」とは「自治」という考えと密接に関連していたが、第2代校長の「自治」への関与方針は初代校長時代の「校風」を大幅に変化させるものである。野球部の選手廃止は1914年であるが、校友会の設置による生徒の「自治」への関与と合わせて、初代校長とは異なる方針が強く打ち出されることとなった。およそ30年にわたる初代校長時代の「校風」を掲げる生徒にとっては受け入れがたいものであり、卒業生を巻き込んで排斥運動が行われたのであるが、その過程で初代校長によって体现されていた「校風」と野球とはなにかということが意識されることになった。ある生徒は、「以前の松中は誠に一家の如き観ありき。校友の精神や高潔剛健其の意気や天に冲せんずるものありき。而して此の美しき校風の由つて来る源は何処にありや。余は是を以て子弟観の理解円満、自治制の確立、野球の隆盛に帰するに躊躇せざる者也」と述べ、「曰く、自治団体の善用、曰く野球の復活。／此の二者は誠に松中の粹。松中の華。松中の歴史を彩つて離るべからざるもの也。小林先生の卓識を以て大いに奨励尽力せられてより漸く進歩して松中の精神の根源とはなり

ぬ」としている⁸。この引用文でも明らかなおと、過去と現在を対比させることで野球と「自治」を初代校長からの「美しき校風」の基として位置付け、「松中の歴史」の中で「松中の精神の根源」となったことが示されている。

第2代校長による野球部選手廃止は、単に生徒の活動を制限するという域を超え、初代校長時代の30年間との断絶を生徒に示すものであったとすることができる。さらに、生徒によるその「復活」は、野球と「校風」との関係を明確にすることになった。野球部選手の「復活」は、初代校長在任時のように、校長によって体现されていた野球と「校風」との自明なつながりを「復活」させたのではない。目に見えない「校風」と、すでに他界した初代校長とを表彰するものとして野球が位置付けられたのである。

校長の交代によって、松本中学校での野球は大きく制限された。同時に、野球と「校風」を結びつけていた初代校長を失ったことで、野球によって「校風」と初代校長が表されることになった。

野球も含めて競技は勝敗という目に見える基準が存在する。

小林先生の此の技を創められしより三十年。松中は啻に野球のみならず、他の運動競技に於ても優秀なる成績を示し学問人格の点に就ても常に天下に覇を称へたりき。然るに野球の奮わずなりし以来数年間に於て、他の競技の不振なるのみならず、松中腐敗墮落の声は内外齊しく興り、事実も亦之に近きものありて、校友の意気は消沈し、統一は失はれ、我利々々主義の漫る所とはなり了んぬ。⁹

野球に限らず優秀な成績を残していたが、野球が不振になった数年間では「腐敗墮落」しており、「事実」と近いと述べている。これは、先の「美しき校風」の根源として野球が位置付けられていることと関連している。すなわち、「校風」がよいので野球が好成績を残すのではなく、野球が好成績を収める

ので「校風」が美しいものとして表れるのである。この文章の直後には、「松中の野球とは独り選手のみならず校友が熱誠の応援を含むを忘るゝ勿れ。松中の野球をして決してベースボールに終わらしむる勿れ。松中の野球は何処迄も松中の野球たらしめよ。」¹⁰との呼びかけがある。競技成績によって「校風」が判断される以上、生徒は野球となんらかの形で結びつけられる。競技に参加するのは選手に限られるが、「校友が熱誠の応援」によって、「校風」を媒介として野球と生徒が関連づけられるのである。

ところで、野球部の選手「復活」は生徒によって決定されたものである。しかしながら、全生徒が賛成していたわけではない。野球と「校風」との関わりを訴える意見の背景には、野球部廃止を訴える生徒の存在がある。ある生徒は、「惜むべし彼等が往時の校風を以て完全なる校風なりと観ずること。／彼等は徒に往時を歎美する保守的人物也」、「吾人進みて新校風を開拓すべき哉」¹¹と「校風」について論じ、その上で野球部廃止を訴えている。野球部廃止の主張の代表的な論点は二点ある。第一に、「纔か数十人に限られたる野球部に、年々二百五十余円の費用を払ふは、現在の財政状態より無意味極まるものなり」¹²、すなわち限られた生徒にのみ多くの予算を割くのは不適當ということである。第二に、「時代は既に野球の如き団体的なるを過ぎて砲丸、円盤等の個人的のものに進みつゝあるなれば、個人的運動器具の準備完全は目下の急務也」¹³、すなわち時代はすでに野球のものでなく、砲丸や円盤といった個人競技に向いているということである。野球と「校風」を結びつける主張でもこの二点に反論を加えている¹⁴ので、こうした批判を乗り越えるために野球は「校風」を表すという形で「復活」が意味付けられたことがわかる。

野球部選手「復活」の正当性は、初代校長と「校風」を結びつけることによって支えられた。特に、「校風」は競技成績と密接な関連をもって位置付けられたため、勝たなければ野球部選手の存在意義を主張できなくなった。加

えて、「校風」によって全生徒と関連するという理屈は多くの費用を投入することの根拠でもあるので、競技成績と予算が強く影響し合う関係をもつこととなった。

発表全体のまとめにかえて

校長、学校の特色、野球に注目して、それらの関係が生徒によってどのように位置付けられ、積み重ねられていったのかを検討することを通して、松本中学校での伝統の展開を描出してきた。すでに検討してきたとおり、なんらかの考え方や人物がそのまま受け継がれてきたというわけではない。数多くの生徒が、そのとき直面する学校生活をよりよいものにするために考えを表明し、行動することに取り組み続けてきた結果が中学校の「校風」である。「校風」は、生徒の行動に一定の規制を課すと同時に、新しい発想を援護するものでもあったのではないだろうか。また、事物の解釈や関係性を変化させるということは、伝統の中にいた人たちにある程度共有される事物を作り出すことになる。これにより、在校の生徒と卒業生を含む大きなネットワークを形成することが可能になると考えられる。

1 『九十年史』、464 頁－482 頁。

2 『九十年史』532 頁。

3 同書、533 頁。

4 同上。

5 同書、537 頁。

6 『校友』第五十三号（松本中学校々友編輯局、1916 年 7 月）、57 頁。

7 『校友』第五十九号（松本中学校々友編輯局、1918 年 10 月）、108 頁。

8 講堂生「別に臨んで」、同誌、12 頁－13 頁。

- 9 同上。
- 10 同上、16 頁。
- 11 蘇東生「方今の校風問題を論じて野球部の廃止に及ぶ」（『校友』第五十七号、松本中学校々友編輯局、1917 年 12 月）、18 頁、19 頁。
- 12 同上、20 頁。
- 13 同上。
- 14 講堂生前掲論文。

旧制高等学校記念館第 20 回夏期教育セミナー開催報告

かなざわ ふゆき
金澤 冬樹(東京理科大学職員)

8 月 22 日・23 日の 2 日間、長野県松本市の旧制高等学校記念館で「夏期教育セミナー」が開催された(今年の会場は旧制松本高校講堂)。このセミナーは、旧制高校に関連する研究発表などを通じて多様な職種・世代が集まり、ともに学び交流することを目指しており、今年で記念すべき 20 周年を迎えた。本稿では当日の様子を報告したい。

【1 日目】

●基調講演

毎年各分野の第一人者をお呼びする基調講演。今年は、旧制高校の寮歌を研究している東京音楽大学の下道郁子准教授が「旧制高等学校における音楽文化」と題して講演した。下道准教授は、寮歌研究において従来あまり取り上げられなかった音楽学の側面から、研究を進めている。

講演では、特に寮歌の誕生期に焦点が当てられ、西洋音楽の導入期にお

ける寮歌の試行錯誤の過程が紹介された。また、寮歌の伝承の形態や、海外の学生歌との比較などが解説された。発表は映像などを多用したほか、ピアノによる実演や、東京音楽大学大学院生による当時の歌曲披露などが行われ、聴覚を使った講演が行われ、来場者が熱心に耳をすませている姿が印象的だった。

●「寮歌の時間」

基調講演の後、旧制高校にあまり馴染みのない市民の方に向け、寮歌に親しみ理解してもらうことを目的に、新たに「寮歌の時間」というコーナーが企画された。この日のために結成された松本市民による有志合唱団の皆さんが、一高や松本高などの寮歌を披露した。合唱の合間には下道准教授が解説を行い、時代状況を踏まえてどのような特徴があるかなどの説明を行った。

●懇親会・思誠寮 OB による寮歌披露

その後引き続き講堂にて、希望者による懇親会が開催され、例年通り世代や職種を越えて盛んに交流が行われた。ただ、今回は基調講演のテーマが「寮歌」ということもあり、信州大学思誠寮 OB の方（1990 年代在寮）が特別ゲストとして登場した。信州大学思誠寮は、旧制松本高校時代からの歴史ある学生寮で、現在も自治寮として運営され、今なお学生の間で寮歌が歌い継がれている。

思誠寮 OB は太鼓による拍子の中、在寮時そのままの雰囲気や披露。譜面に残っている音階とは異なり、独特のリズムや掛け声による歌い方で、参加者は初めて見る「本場」の寮歌に興味深々の様子だった。また、懇親会には旧制松本高校 OB の他、現役の信州大学の学部生も参加し、旧制松本高校～信州大学の世代を越えた交流が行われた。

【2日目】

●研究発表会

2日目は、4人の研究者から最前線の研究動向が紹介された。

・古仲素子氏（東京大学大学院生）は、ハーモニカ普及が旧制中学校の音楽活動に大きな影響を与えた過程を紹介し、学校の唱歌教育とは異なる、学生の音楽活動と楽器産業・文化との関連を指摘した。

・堤ひろゆき氏（東京大学特任研究員）は、旧制松本中学における野球（部）に焦点をあて、学校による野球（部）の公認や否定に、学生が反応する中で「校風」が意識化されていく過程を紹介した。

・田中祐介氏（明治学院大学助教）は、第二高等学校の忠愛寮（キリスト教信者の学生が入寮）の寮日誌を取り上げ、寮日誌が信仰や思想の誌上議論の場になる過程を紹介し、「集団が綴る内面（自己表象）の日記」として解釈した。

・吉葉恭行氏（秋田高等専門学校教授）は、従来注目されることのなかった、戦時下における帝国大学生の科学技術動員（大学院特別研究生制度）について取り上げ、多数の聞き取り調査の結果とともに実態を紹介した。

●旧制高校 OB による記念館展示の解説

研究発表会の昼食休憩の際、旧制高校 OB の方による旧制高等学校記念館の展示解説を行った。旧制高校の基本的な解説はもちろん、「当時はよく〇〇を読んだ」「寮でよく友人と〇〇について議論した」など、文献では残りづらい当時の学生生活の様子などが解説された。また、寮室や学生服などの解説における当時の「バンカラ」エピソードの数々には、参加者からも思わず笑みがこぼれた。旧制高校 OB に当時の話を聞く貴重な時間となった。

以上、2日間の報告である。旧制高校という特異な中心テーマを扱う点ももちろんであるが、全国から様々な職種・世代の人々が集まり学ぶという企画は、全国的にも珍しい試みであろう。セミナーは今年で20周年。この貴重な試みの蓄積を、今後の記念館およびセミナーの発展につながることを期待される。

帝国大学の中の専門学校

—北海道帝国大学と専門部の卒業後進路—

まつしま てつや

松嶋 哲哉(日本大学大学院)

はじめに

本稿では、専門部の卒業後進路から専門部の社会的位置づけを検討したい。そのために、専門部の卒業後進路だけではなく、学部の卒業後進路の比較の中で考察する。先に、北帝大における学部(農学部・工学部)と専門部(農学実科・林学実科・土木専門部・水産専門部)の卒業後の進路を示すと表1・表2の通りである。

(1) 専門部の進路状況

専門部の卒業後進路として大きな比重を占めていたのは、①技術官、②中等学校の職員、③実業経営、銀行及会社員の実業関係が挙げられる。割合で示せば、上述の3つが、農学実科で68.7%、林学実科で82.7%、土木専門部で81.8%を占めていた。中でも、各専門部で最も多いのが「技術官」であった。実業関係に就職する者も多く、「実業経営」と「銀行及会社員」を合わせれば、土木専門部を除いて約30%の割合であった。専門部の卒業後進路は、「技術官」と実業関係についた者で全体の約50%以上を

占めるのであった。

さらに、専門部ごとで比較すると次の 2 点を指摘できる。第一に、林学実科と土木専門部の卒業後進路において「技術官」が多いことが指摘できる。特に、土木専門部は、「技術官」となったのが 57.8%であり、農学実科(23.1%)・水産専門部(24.2%)と比べると 2 倍近くの生徒が、林学実科の 42.2%と比較しても土木専門部は 15%ほど多い。

第二に、専門部の中でも、土木専門部の卒業後進路は特徴的であることが指摘できる。土木専門部は、「技術官」となる者が多いことは先に指摘したが、それに加え「実業学校及中等学校職員」中等学校職員となった者が他の専門部に比べて少ない。土木専門部では、「実業学校及中等学校職員」となったものは、8 人(1.3%)であり、他の専門部、農学実科=64 人(12.5%)、林学実科=69 人(11.2%)、水産専門部=74 人(10.5%)であった。そのため、土木専門部では、「技術官」と実業関係に就いた者で 80.5%を占めているという特徴を持つ。

(2) 学部と専門部の進路状況の比較

学部卒業者と専門部卒業者の進路状況を比較すると、①専門部では「其他ノ官公吏」となるものが、学部より少ない傾向にあること、②専門部は「大学及専門学校職員」となるものが、学部よりも少ない傾向にあること、③専門部(農学実科・林学実科)は「銀行及会社員」よりも「実業経営」に就く傾向があることを指摘できる(表 1 参照)。しかし、これは厳密な比較をすれば有意なほどの差とは言い難い場合もあるため「傾向」程度にとどめておく。

しかし、学部と専門部の進路を鳥瞰すると、上述のような傾向はあるが、明確な違いということを指摘することは難しい。全体として、学部と専門部の進路先は類似性があるように考えられる。例えば、工学部と土木専門部は、

両者とも「技術官」を多く輩出している点で共通している。農学部と農学実科の進路傾向にも類似性が読み取られる。そもそも、学部と専門部がほぼ同一の統計表に示せることから、両者の類似性が感じられる。

おわりに

以上、専門部の卒業後進路を検討してきたが、その特徴として挙げられることは、専門部は①「技術官」となる者が相対的に多く、「其他ノ官公吏」となるものは学部よりも少ない傾向を持つこと、②その中でも、林学実科と土木専門部では「技術官」となる者が多いこと、③実業関係につく者が相対的に多く、その中でも「実業経営」につく者が学部よりも多いこと、④学校職員としては、中等学校職員が多く、例外的に「大学及専門学校職員」につく者がいたこと、⑤しかし、全体を鳥瞰すると学部と専門部での明確な違いは読み取られず、学部と専門部での類似性が読み取られることを指摘できる。このことは、両者の社会的位置づけがある程度同一であったことを示しているものかもしれない。

学部と専門部は、法令的には全く別種の学校であったが、一つの大学の中で併存し、その機能も重複するところが見られる。両者の関係性がどのようなものだったのか、詳細な検討は今後の課題としたい。

表1 部科別生徒就職状況(実数)

(1931年3月現在)

種別	農学部	工学部	農学 実科	林学 実科	土木 専門部	水産 専門部
技術官	232	86	118	259	365	171
其他ノ官公吏	159		25	31		56
大学及専門学校職員	214	18	17		6	16
実業学校及中等学校職員	144		64	69	8	74
外国留学及海外在住	10		15	2		16
大学院学生(専門部は、大学正科生)	16		2	1	2	
他学部学生(専門部は、大学選科生)	3		1			
実業経営	122	2	94	88	53	58
銀行及会社員	275	95	75	92	90	158
官庁嘱託	26					
農会、産業組合職員、農場監督	13		25			
新聞記者	8					
宗教家及著述業(専門部は宗教家)	4				1	
芸術家(画家)			1			
兵役	2	3	2		3	7
不詳	32	29	30	5	25	96
未定	21		2	10		
死亡	74	3	40	57	78	55
合計	1355	236	511	614	631	707

表2 部科別生徒就職状況(割合)

(1931年3月現在)

種別	農学部	工学部	農学 実科	林学 実科	土木 専門部	水産 専門部
技術官	17.1%	36.4%	23.1%	42.2%	57.8%	24.2%
其他ノ官吏	11.7%		4.9%	5.0%		7.9%
大学及専門学校職員	15.8%	7.6%	3.3%		1.0%	2.3%
実業学校及中等学校職員	10.6%		12.5%	11.2%	1.3%	10.5%
外国留学及海外在住	0.7%		2.9%	0.3%		2.3%
大学院学生(専門部は、大学正科生)	1.2%		0.4%	0.2%	0.3%	
他学部学生(専門部は、大学選科生)	0.2%		0.2%			
実業経営	9.0%	0.8%	18.4%	14.3%	8.4%	8.2%
銀行及会社員	20.3%	40.3%	14.7%	15.0%	14.3%	22.3%
官庁囑託	1.9%					
農会、産業組合職員、農場監督	1.0%		4.9%			
新聞記者	0.6%					
宗教家及著述業(専門部は宗教家)	0.3%				0.2%	
芸術家(画家)			0.2%			
兵役	0.1%	1.3%	0.4%		0.5%	1.0%
不詳	2.4%	12.3%	5.9%	0.8%	4.0%	13.6%
未定	1.5%		0.4%	1.6%		
死亡	5.5%	1.3%	7.8%	9.3%	12.4%	7.8%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

新制大学の生態誌(8)

—新制大学と戦争・平和〔2〕—

いのうえ

みかこ

井上 美香子(九州大学)

前号に引き続き(本稿の目的及び検討方法、報告書『大学に於ける一般教育-一般教育研究委員会中間報告-』の概要については7月号及び8月号を参照されたい)、報告書『大学に於ける一般教育-一般教育研究委員会中間報告-』(昭和25年)について、みていくこととしたい(以下、『報告書』と記述する)。

昭和25年度の『報告書』の構成は、昭和24年度の『報告書』と同様、「緒論」(一般教育研究委員会が一般教育の理念や在り方について論述)と人文・社会・自然科学の各部門の「授業プラン」や「コースプラン」から成る。

まず、「諸論」に着目してみよう。昭和24年の『報告書』が一般教育を通して世界平和に貢献できる人材を養成していくことを掲げ「平和」というキーワードを全面に押し出していた。昭和25年の『報告書』でもその姿勢は変わらない。むしろ、昭和25年の『報告書』は、専門教育主義に陥ってしまった旧制大学を批評し、それ故に大学教育にとって一般教育が如何に必要かを論述している。このように、大学教育における一般教育の意義を位置付けただうえで、新制大学の進むべき方向(使命)を述べているという点は注目に値する。

なお、昭和25年6月の「大学基準」の改訂に伴い、一般教育関係の条項に掲げられた科目も変更されたが、昭和25年の『報告書』が9月に発行されている点からも明らかな通り、同報告書では改訂前の「大学基準」に依拠した研究成果である。

さて、以下に同報告書で掲げられた科目案を示すこととしたい。

〔人文科学〕

科目)哲学(○)、倫理学(○)、文学、歴史、音楽、美術

〔社会科学〕

科目)政治学、経済学、社会学、法律学、人文地理学、心理学(○)、倫理学(○)

〔自然科学〕

科目)数学、物理学、化学、天文学、地学、生物学、心理学、統計学、人類学

上記のうち、○印のものは、授業案の中で「平和」や「戦争」等をキーワードとして取り上げている科目である。○印の科目では、「平和」や「戦争」をどのように取り扱っているのだろうか。前回と同様に、紙幅の関係上、詳述することはできないが『報告書』(昭和25年)をもとに以下に要約する。

〔人文科学〕

・哲学(第4案):人間性の開発と「民主的平和的な文化国家」(p22)の建設に寄与するべく、東洋の哲学思想の特性・世界観・人生観を学生に理解させ、正邪の区別ある道徳的感情を養成することを目指す(pp21-24)。

・倫理学(第1案):「悪」、「善」、「徳」、「道徳的理想」等の課題を設け、そのそれぞれについて検討することを通して、道徳現象の本質に対する理解、道徳的生活を遂行できるようになることを目指す。なお、「道徳的理想」について、「自由」や「法律」、「永久平和の問題」(p30)という観点から検討する(pp28-31)。

・倫理学(第3案):時代の変化や社会の特質の変化に応じた「実践的社会的倫理学」(p29)が必要であるという観点から、民主主義を家庭・社会・国

家等の諸点から検討するとしている。なお、家庭・社会・国家等の諸点から民主主義について検討する際の柱の1つに「平和的秩序による問題の解決」(p37)を掲げている(pp35-40)。

〔社会科学〕

・心理学: 社会的立場における個人及び集団の行動の法則を理解させることを目指すとし、「社会的相克とその解決」という課題のもとに、「戦争と平和への道」(p28)を検討することとしている(pp27-29)。

・倫理学: 人文科学における「倫理学(第3案)」と同様(pp29-33)。

ここから、「平和」な社会を築いていくために民主主義的市民としての思想や行動規範について上記科目をとおして涵養しようとする姿勢がうかがわれる。

ただし、「平和」や「戦争」をテーマとしている科目として、昭和24年の『報告書』では歴史(国史)歴史(西洋史)・倫理・政治・経済の5科目であったのに対し、昭和25年の『報告書』では4科目に減少している。しかも、人文科学と社会科学で掲げた「倫理学」の科目案は、内容が全く同一のものである点を考慮すると、実質、「平和」や「戦争」をテーマとして扱う科目案は3科目ということになる。

加えて、自然科学に関しては、前年の『報告書』と同様に、「平和」や「戦争」というテーマについて全く触れておらず、「平和」な社会を追求する民主主義的市民の育成という目的を意識していないかのように、専門に対する基礎的科目となってしまう。

昭和25年の『報告書』では、社会の「平和」を追求する民主主義的市民を育成するために新制大学において一般教育は重要であることを「諸論」で説き、大学教育に位置付けることができた。しかしその一方で、「平和」を追求する民主主義的市民を育成するための方法となるはずの一般教育科目

に関しては、「平和」や「戦争」をテーマとするものは少なく、昭和 24 年の『報告書』と同様に、その具体的な方法を提示するには至らなかったといえる。

『岩手学事彙報』中の東北地区での森有礼演説記事

こみやま みちお
小宮山 道夫(広島大学)

前回記事で他誌からの転載でない「東北地区での演説」としてあげたものを3つ紹介するつもりであったが、そのうち「(10)森文部大臣の演説〔第 87 号、1887 年 7 月 5 日、17～18 頁〕」は、調べてみると『教育報知』第 73 号が元記事で、『森有礼全集』第 1 巻 534-535 頁に掲載の「附載 文部大臣巡視概況」ものとほぼ同じであることがわかった。わずかに漢字や送り仮名の異同があるが、同じ用字の誤りもあり、3 日遅れで発行されている『岩手学事彙報』が『教育報知』の前後に説明を付けた上で引用したのであろうと推測する。内容は宮城医学校における演説の概要で、全国的な医学生の気風、気力品行に欠ける弊害をどう変革するかという趣旨のものである。「若生徒に気概の不足にして品行の不十分なる所あらば余は先つ生徒を責めずして教員の不行届を責めんとするものなり」と述べ、「教員さい深く戒しむる所あれば生徒は如何様にも養成するを得可きものなり当校は果して医学一般の風潮内にあるや否余の未た知らざる所なれとも当局の諸氏に於ては深く注意して此一点に欠くる所なき様励精致されたきものなり」と鼓舞した内容である。

次の「(24)文部大臣と教育協会〔第 133 号、1888 年 10 月 15 日、11～14 頁〕」は上述の記事の逆パターンで、『岩手学事彙報』の記事が『教育

報知』第 143 号(11 月 3 日)に要約されて使用されたと理解できる。『教育報知』の記事「岩手県教育協会懇親会における演説」は『森有礼全集』第 1 巻 758 頁に掲載されているが、『岩手学事彙報』の方が詳しいので、長くなるが全文を引用しておく。貧民の教育に熱弁をふるっていることと、岩手での巡廻の様子が良くわかる記事である。13 日の記事では記者が「君か代」なる歌を唱へて」いる様子に関心を持っていることがわかる。新しい学校文化がまさに定着しようとしている現場の雰囲気伝えてる。

●文部大臣と教育協会 同大臣は愈去る十一日午後四時二十分を以て着盛せられ直に杜陵館に開きたる岩手教育協会に臨まれたり今其詳況を記せば当日会せる者は会員は勿論当地の有志者凡そ二百余名にて大臣は服部参事官、中川秘書官、相良視学官、文部属木村匡、板垣知二の諸氏と共に到着会長の案内にて扣席に暫時休憩の上会員に向て一場の演説あり終て宴会を開き七時頃坐を退き旅館なる内丸の秀清閣に投宿されたり其演説の大意は左の如し

諸君教育会ノ事ニ付テハ尚明日申述ブベキ次第アルヲ以テ今日ハ只教育会ガ未タ為シ居リラザル事柄ヲツツ御話シ申シ若シ其御話シタル事ハ会員諸君ノ同意ヲ得実行ヲ遂ケラルハナラバ教育上ニ於テ大ニ利益アラン

其ハ他ニアラズ教育ノ資本ヲ作ルト言フ事ナリ教育ノ資本ハ何故ニ作ルカト云フニ貧民ノ子弟ヲ教育スル為メニシテ此貧民ハ都会ニモ町村ニモ頗ル多く從テ巨額ノ金円ヲ要スルコトナリ扱テ如何ノ方法ニ抛リテ金円ヲ得ベキヤ古ヘノ御用金募集ノ如キハ姑息ノ手段ナリ假令一ハ時行ハルモ永遠ノ策トハナスベカラス今日ニ当リ金円ヲ得ルノ法ハ専ラ世ノ廢レテ居ル忘レテ居ル無用ノ物ヲ見出シテ之ヲ利用スルニ如クハナシ

余ハ今日始メテ岩手県管内ニ入り沿道ノ有様ヲ見一ニノ心ニ浮ビタル者アリ則チ官有地ナル道路ノ両側ニ仕事ナキカト云フ事ニテ之ヨリ金円ヲ得ルト同時ニ農業ノ裨益ヲ得ルノ方法アラン其一トシテハ官道ハ勿論里道ニ至ルマテ両側ノ空地ニ悉ク桐ナリ松ノ木ナリ植ヘ付ケ平時ハ枝ニ縄ヲ張リテ作物収穫ノ折ナトハ干シ乾スノ用ニ供シ生長スルニ及ヒテ伐採シ売払ハ、金益兩ナカラ得ラルヘシ尤モ沿道ノ官有地ハ右ノ目的ヲ以テ出願スルトキハ多分無代価ニテ払下クルコトハ出来ルナラント思ハル、而シテ余ハ諸木中桐ヲ以テ第一トス桐ハ仕立ツルニ年限アリテ目的立ち且ツ常盤木ニアラサルヲ以テ作物ニモ害トナケレハナリ(金ニテ取ルモ、品物ニテ取ルモ金ヲ得ルニ至テ同シ)但最初苗木ヲ植付ルニ方り多少ノ費用ヲ要スルハ勿論ニテ之レハ會員ヨリ出スモ可ナレトモ又一文ナシニテ出来話ナキニアラスソハ沿道ノ並木松ヲ無代価ニテ払下ヲ願ヒ法ニテ官ノ信用ヲサヘ得タランニハ恰モ一大山林ヲ貰ヒ得ケタルニ異ナラス貧民子弟教育ノ方法十分ニ其基礎ヲ固メ得ヘシ、右ハ只一ノ例ナリ詮索セバ尚多クアルベケレバ教育会ノ為メ及ヒ農家ノ為ニモ一挙兩得ノ策ヲ立テラレベシ余ハ今日初メテ当地ニ来リタレハ如何ナル遺利ノ存スルヤ知ラズト雖ヘトモ今述ヘタル方法ハ官ニモ理由ノ確カナルモノト信用セラレ最モ実行シ易シカルヘシ蓋シ教育ノ業タル富者ノ子弟ハ左ノ心配ニ及ハス成ルヘク貧民ノ子弟ニ出来ル丈ノ教育ヲ施ス方法ヲ主眼トスルカ故ニ勉メテ廃物利用ノ方法ヲ思ヒ起シ且ツ教育会ハ貧民子弟ノ為メニ企テザルベカラスコレ此方ヨリ出シ置ク問題ナリ若シ諸君同意ナラバ実行アレ只同意ノミニテハ何ノ効ナシ又不同意ナラバ其点ヲ十分ニ余ニ明示アリアシ、以上申述フル処ハ本県ニ於テ初テノ事ナレドモ他県ニモ亦施行ヲ望ムヲ以テ諸君ノ同意ト否トハ大ニ關係ヲ有セリ願クハ本県ヨリ実行シテ全国ノ規範トナサレンコト

ヲ

十二日 午前八時出盛ノ各郡長及び県会常置委員諸氏は旅館なる秀清閣に招かれ教育上に付何か訓諭せられ後同十時岩手尋常師範学校に臨まれ各教室一覽の上同校生徒及び附属小学校生徒の兵式並に軽体操を一覽あられ同校に於て午餐を喫したる後午後三時南岩手高等小学校に臨場直に当日参集せられたる各郡長県官郡村吏員町村會議員其他庁下市中の有志者凡三百名に対し一時間許り演説ありたり其主意に前号の彙報に記載したる東京府にての演説と異ならされは記せず其をり落成開校式に臨まれ午後五時半頃帰館せられたり

十三日 午後九時旅館なる秀清閣を出てられ盛岡始裁判所に臨まるそれより岩手尋常中学校に立寄り親しく教授を一覽せらる右了りて仁王尋常小学校に臨まる>筈なりしに俄然臨校を止められ直ちに茨島に赴き各学校生徒の運動を一覽せられたり大臣の同所に着せられたるや生徒一同整列して「君か代」なる歌を唱へて祝意を表したり大臣には休憩所に於て午餐を喫し了りて各小学校生徒の矯正術徒手体操を一覽せらる又大臣のお望みにより各学校生徒の旗奪ひ綱引等の競争を演しそれより師範学校生徒の発火演習を一覽に供し終りて帰路に就かる途次盛岡監獄及岩手県庁に立寄午后六時旅館に帰着せられたり同日は時々細雨に襲はれ殊に運動際には余程強かりしにもかゝわらず生徒の競争したるは勇ましくも亦感し入りたり此日同所に集合したる各学校生徒の人員は一千四百五十人斗りなり又見物人も夥しかりき

十四日 午前八時出発青森県へ赴くに付師範学校生徒同附属小学校生徒中学校生徒南岩手高等小学校生徒各尋常小学校生徒等千八百人斗り夕顔瀨向片原迄見送られたり

3つ目は「(26)文部大臣の示諭〔第134号、1888年10月25日、19～20頁〕」である。農事講習所、尋常師範学校、尋常中学校を巡廻した時の示諭の内容である。尋常師範学校の記事の分量が滞在時間や熱の入れ様を物語っているかのように興味深い。「当校も随分改良を加へ完全したる徴候も見ゆ」と褒めたのは良いが、「改良を要する点あるを発見せり」などとしながら指摘せずに「各の考究発見に任すへし」と勿体ぶったのは森らしくないが、丁寧に説明しないところは森らしいのかも知れない。あるいは存外些末な改良点のみであり大きな改良点は思い当たらなかったのだろうか。いずれにせよ文部大臣の「各の考究発見に任す」発言は現場には迷惑だったことだろう。

●文部大臣の示諭 森文部大臣の当地滞在中農事講習所尋常中学校尋常師範学校に臨まれ示諭されたる由其模様大意左の如し

農事講習所 同所へ臨まれたる時は生徒の作業中なりしか大臣には教場に入られず直ちに第一種芸所に於て現業の模様を一覧ありて復同所一体の実業は華奢に流れずして能く実地に適せり又農事講習所にては専ら農業経済に注意し毎日の業務を日記に登録し其収入と支出との得失を明かにすへしと示諭せられたり

尋常師範学校 同校にては先づ校長より本校及附属小学校一般に関する諸表十数種を一覧に供したるに大臣には同校借品の処分方法。生徒賄自炊の利益同校経済に関する注意の要点等を示諭されたり夫より本校及附属小学校の授業並に県下各学校生徒の製作品(図画。習字。作文。裁縫品)展覧所生徒寄宿舎一般。手工室。体操。演技等を巡覧ありて後講堂に於て職員一同に対し当校も随分改良を加へ完全したる徴候も見ゆれとも尚此外にも改良を要する点あるを発見せり但し

此事は態と示摘せずして各の考究発見に任すへし只生徒教養上の事は能々注意すべき事にて其責に任するものは協心戮力を専一とし校長以下教頭幹事教諭等枢要の地位にあるものは勿論何れも立場々々を守りて能く分を尽し職に従ひ若し其任に堪へざるか如きあらは之を免黜するの外なし云々及び生徒に対しては操行査定を実施する様に勤め且學術のみならず其人物をも鑑定して将来学校長たるに適するや又は教員たるに過ぎざるや大体を定め置きて郡区長の任用に際し参考に供すへし又平生にありては生徒同士の短所は互に腹藏なく忠告し合ひ其忠告書は幹事若くは教頭に出すへし尤も信愛の情を表章することを専一とし讒誣に涉ることあるへからすと示諭せられ体操は賞せられし尋常中学校 同校にて師範学校の如く各科を巡覧ありて後体操は猶ほ一層氣勢を張りて運動せしむへし倫理科は受持教諭を呼び同科授業の方法注意等を訪はれし上論語小学の如きは今日の時勢に適せざる所もあり又政治に涉る所もあれは宜しく取捨する所なかるへからす因ては夫々協議して適宜の採択あらんことを要す云々と示諭せられたり

どんなことが「自治ではない」とみなされたのか(7)

—相談会に対する小林有也校長の指導(その2)—

とみおか まさる

富岡 勝(近畿大学)

前号では、松本中学の小林有也校長の相談会に関する指導を具体的に示唆する史料を紹介し、生徒に細かな口出しをしない寛大な態度をとりつつも、放任するのではなく、生徒たちが相談会で決めた内容に耳を傾け、必要に応じて「そんなことをしてくんなさっては困りますなあ」の一言を通じて生徒に再考を促すというような指導振りであったことを述べた。

本号では、こうした小林有也校長がどのような理由で相談会に対してこうした指導方法をとっていたのかを他の史料を紹介しながら考察したい。

小林校長は、1914(大正3)年6月に校長在職中に病死したが、臨終の間際に次のような生徒宛の言葉を残したと教員の服部元彦は伝えている。

諸子はあくまで精神的に勉強せよ。而して大に身体の強健を計れ。
決して現代の悪風潮に染み墮落するが如き事あるべかれず(『校友』
第48号小林先生追悼号、1914年12月30日、117頁)

おそらくこの小林校長の言葉は、最期の言葉であることから、松本中学の生徒に対する基本的な思いを反映したものであったと想像できる。

しかし、この言葉にどのような意味が込められているかは、この言葉だけでは明確には分からない。例えば「精神的に勉強」とはどのような意味であろうか。そこで、小林校長の他の言説をヒントに考えていきたいと思う。

「諸子はあくまで精神的に勉強せよ。而して大に身体の強健を計れ」については、数少ない小林校長の言説を記した史料のなかで、『校友』(前期)第7号(1896年12月28日、43頁)に記された以下のような「校長の諭誨」が参考になるのではないかとと思われる。これは、校長の説諭の記録であり、直接述べた言葉であるかどうかは不明であるが、実際の発言をおおよそ反映していると考えてよいだろう。

十一月四日午前十一時我か小林校長は、全生徒を講堂に集め諄々として諭告せられたり、今、其の梗概を挙げれば、始め前学年試験の成績に就きて所感を述べられぬ、次ぎに智徳体三育の必らず欠くべからざる事より近来校内の武芸に一進化を見ざる事を概き如今朔風漸く来らんとして未だ来らず、寒暑身に適する時に於て相共に憂々其の技を研

磨せん事を期せられたり、而して終りに臨みて最も痛言せられしは精神修養の事なり、叩案一番慨然と云はる其の言に曰く、如何に武芸に修達し身体を鍛錬すと雖、若し其の人をして一片の精神でふものを存せざらしめば是れ決して頼むに足らず、志士の与せざる所なり、例令武芸に達せず体育優れざる者と雖、精霊の氣抜くべからざる者を持するあらば、よく卓然として自立する事を得む、予は寧ろ此人を揚げんとす、試みに当世を通観するに、此兩者を具備するふもの果して幾人かある、惟うて茲に至れば豈慨嘆せざるなきを得んや、諸子よく之を記せよと、生等誰か高論感佩憤激せざらんや

ここで小林は知育徳育体育のいずれも必要であると述べながら、これら全てにおいて「精霊の氣」を抜かないような修養が必須であるとする。つまり単なる「諸子はあくまで精神的に勉強せよ。而して大に身体の強健を計れ」というのは、単なる知育、単なる体育に留まるのではなく、「精霊の氣」をこめて、心から取り組むことであると捉えることができるのではないだろうか。

このように小林校長の基本的な教育的姿勢を捉えると、小林校長が生徒が自治的に校内のことを話し合っただけで決定していく相談会に向けた期待を読み取ることができるのではないだろうか。つまり、生徒たちに学習や運動について「精霊の氣」の抜けたような状態で中途半端に取り組むことを求めたのではなく、生徒たちが学習や運動などを含む校内の諸活動に真摯に取り組むことを期待したのではないかと考えられる。小林校長が生徒たちの自治を重視したのも、このような考え方がもとなっていたのではないだろうか。小林校長にとって、生徒が「精神的に」取り組まないような活動、本気で取り組まないような活動は「自治ではない」とみなされたのではないだろうか。

また、小林校長でこの史料のなかで「武芸」「志士」などの用語を用いて、松本中学の生徒たちを近世の武士になぞらえて表現している。小林校長が

どのようなことを意図してこうした表現をしているのか、という点について、
他の史料をもとにして次号で考察してみたい。

**『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項(2015年6月15日現在)**

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限 3 年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限 1 年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年 600 円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごまねに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事 1 本分の分量は、A5 サイズ 2 枚～4 枚ぐらいを目安とします。
8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターの PDF ファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に 1 回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

編集後記

最近、他大学の若手職員の皆さんと研究会や懇親会を開く機会が多いです。そんな中、大学のたどってきた道に関心を抱く職員の多さに驚いています。もちろん本ニューズレターは紹介していますが、今後は、大学職員側からの問題提起を挙げるなど、相互交流ができればと考えています。(金澤)

高校球児であった俳優@佐藤隆太さん(1980年～)は、控えの外野手で甲子園は憧れのままで終わったと。しかし、「挫折して、夢破れて、形は変わりましたが、すべてはずっとつながっていたと思えました。今の努力は何かの形で必ず生かされる時が来ます。」「(白球とわたし 高校野球 100年 5)『朝日新聞』2015年7月10日)といい、俳優となり映画『ROOKIES 卒業』の撮影でなんと甲子園の舞台に!筋書きのないドラマですね。(谷本)

26日27日と(クマが出るという)宮城教育大学で教育史学会でした。多くのニューズレター執筆者の方とお会いできてたいへん楽しい時間でした。仙台の夜は最高でした(もちろん学会も)。ということで、ニューズレター執筆者の懇親会を近く行いたいですね。(山本)

私の担当する「教育の思想と歴史」などの科目は、1年生の後期から履修可能なので、先日開講した後期のクラス人数は前期の倍ぐらいになりました。例年通り授業準備で忙しい日々になりそうですが、「より多くの学生諸君から学べる充実した後期」として楽しみたいものだと思います。(富岡)

恥ずかしながら(?)「シルバーウィーク」というものをつい最近会話の中で知りました。カレンダーを見てびっくり。「この忙しい時に!」と思った自分は世間からずれてしまっているのでしょうか。大学人共通の認識であって欲しいな、と少しばかり心の救いを求めています。(小宮山)

とうとう9月も半ばを迎えます。早いなあ…(溜息)。先日、夏がきたばかりだと思っていたのに、もう秋です。気ばかり焦る毎日です(汗)。(井上)

私は学部時代を東京女子大で過ごしましたので、コラムに出てきた塚越さんのエピソードに懐かしさが溢れてきました。先日十数年ぶりに、(おそらく)コラムに出てきた喫茶店に行きましたが、レトロで落ち着いた雰囲気は当時のままでした。(田中智子)

本ニューズレターを印刷される場合、Adobe Reader などの「小冊子印刷」機能を使ってA4サイズ両面刷りにすれば、ちょうどA5サイズの小冊子になります。

